初恋リグレット

太陽ヶ峰 向日葵

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
初恋リグレット

【Ｎコード】
Ｎ３５９１Ｕ

【作者名】
太陽ヶ峰　向日葵

【あらすじ】
平凡で幸福で緩やかな生活を満喫していた海里。彼女には、密かに気になっている人がいた。初夏の清々しい風が肌を撫ぜる、よく晴れた六月。それは、素晴らしくて見惚れてしまうほど、美しく澄み切った青空の日のことだった。憧れの彼、飛鳥が家へやってきて、いきなり告白されてしまった！？

それは、初夏の清々しい風が肌を撫ぜる、よく晴れた六月のことだった。今の学校に転校して、三ヶ月が経とうとしていた私は、朝のショートホームルームで渡された一枚のプリントの内容に、胸をときめかせていた。

もうすぐ学校は、衣替えの季節を迎える。春から毎日のように着ていた長袖の制服は、夏仕様の涼しげで、薄手の軽いものへ変わる。大好きな白色をベースとしたセーラー服。ところどころに入っている、優しい桃色のラインが私のお気に入りだ。それを着て、学校へ行くと考えるだけで、嗚呼、今から楽しみで仕方がない。

上機嫌の私の足取りは、自然に軽やかなものとなり、ついには、鼻唄交じりにスキップしている自分がいた。そうだ、家に帰ったらハムスターのロロちゃんに教えてあげよう。きっと彼女も、滑車を懸命に走って、大喜んでくれるだろう。あの子は私の制服が好きだから、もしかしたらポケットに入って、暫くの間、そこから出てこないかも知れない。想像するだけで、自然に笑みが零れた。

毎日、毎日、なんて楽しいのだろう。この満ち満ちた幸せが、長く、長く続けば良いのに。何となく、空に向かってお願いをしてみた。普段あまり信じていない、お空の上の尊き神様。もし、いらっしゃるのなら、どうか、私のささやかなお願いを聞いてください。私は、今が、信じられないくらい幸せなのです。

瞬きをゆっくりとして、今の気持ちを噛み締める。そして、勢いよく顔を上げて、空に向かって微笑む。

今日は、素晴らしくて見惚れてしまうほど、美しく澄み切った青空

だった。そんな、日常の小さな喜びに、私は、少しの間浸っていた。

◆◇◆◇◆

上機嫌で家へ帰ってくると、いつもの光景に、あるはずの無いものが門の前にあった。それは一台の自転車だった。見たところ、マウンテンバイクらしく、全体のデザインとしては、どちらかというと派手なもので、青色を基調としていて、所々に黄色が散りばめられているため、流れ星のようだった。

一体、誰の持ち物なのだろう。人見知りの激しい私は友達と呼べる人間は数えるほどしかいない。だから、友達の自転車は大体覚えている。確かにこんなデザインのものを持っている人はいなかった。それに、これはどう見ても、女向けではなく、男向けの格好いいデザインだ。こういう性格のせいで私の友達は女の子しかいない。だから、友達は違う。

友達ではないなら、家族のものだろうか。私の自転車はオレンジ色のよくあるタイプの普通のものだし、母の自転車もピンク色の、所謂、ママチャリというものだ。しかも、母は、今日の朝早くから、中学時代からの友人たちと、韓国旅行へ出掛けた。父は只今、単身赴任中なので、ここには居ない。私には兄が一人いるけれど、現在は、ここから少し離れたマンションで一人暮らし中だ。

もしかしたら、他の家のお客さんのものかもしれない。そんな考えが、ふと頭を過ぎった。

いや、でもそれにしては、私の家の前にしっかり置かれている。どう考えたって私の家の人間に、何か用事があったとしか思えない。

少し不安な気持ちを、押し隠すように自分の家を見つめる。どこにでもありそうな住宅街の一角に位置する私の家。今も尚、太陽の光に輝く赤塗りの屋根は、結婚当時、メルヘン作家だった母の要望を父が形にしたもの。なんでも、昔から、メルヘンチックな家に住んでみたいという、強い願望があったそうだ。母の願いは尽きることが無かったらしく、家には、暖炉があったり、煉瓦造りの部屋があったりする。その他にも、かなりメルヘンチックな要素が、ところどころで垣間見えている。

そのためか、この家は、この辺り一体の家の中でも、特に目立っている。悪く言えば、変に浮いている、といったところだろう。当たり前といってしまえば当たり前だ。こんなメルヘンチックな家は、ないこともないと思うけれど、かなり少ないだろう。

それでも、私はこの家を気に入っている。母親がそうなのもあるけれど、私も父や兄からすれば、かなりそういった方向への考えが強いようだ。自身の代名詞が「メルヘン」といっても過言ではない母ほどではないけれど。

もう一度家の門に目を落とす。だめだ、悩んでいても埒が明かない。私は、深呼吸をして、気合を入れた。心の中で自分に言葉をかけ、少し開いている門を抜け、私は慎重に玄関へと向かった。

それにしても、自分の家に入るのに、やたらと緊張しなければならないのも可笑しなものだ。確かに誰かも分からない人間は怖い。けれど、ここは私の家なのだから、住人である私がここまで緊張する必要は、果たしてあるのだろうか。

そんな事を考えながら歩いていると、いつの間にか庭を抜けていたらしく、玄関は目の前になっていた。
そこには、一人の男の子がインターホンの前に立っていた。私と同じ制服を着ているので、多分同じ高校だろうと予想がつく。よく見ると、インターホンを押すか押すまいか迷っているようだった。

同じ高校の人なら、まだ安心だ。きっと何か学校関係の用事があったのだろう。私が見つからなかったから、渡しそびれたプリントを持ってきたとか、きっとそんな簡単な用事だろう。でも、どうやって声を掛けようかしら。「こんにちは」でもないし、「何か用事でもあったの」なんて聞けるほど私はフレンドリーではない。

どうしようかと悩んでいると、結局押さないことに決めたのか、背中を向けていた男の子がくるりと踵を返しこちらを向いた。ばっちり、目が合ってしまった。しまった、何か言わないと。そう思っても私は真っ赤な顔で、魚のように口をパクパクさせるのが精いっぱいだった。こんな時、人見知りな自分が情けなくて仕方が無くなる。

「あ、えっと、驚かせちゃってごめんね。俺は別に怪しい者じゃないから安心して。」

数秒間の沈黙を破ったのは、予想通り、制服の男の子だった。そういって彼は丁寧に生徒手帳まで見せて、私に自己紹介してくれた。

目の間にいる少年は、私が密かに想いを寄せている、同じ高校の飛鳥(あすか)くん。私の学校では、かなり有名な学校一のサッカー少年。結構人気があり、男女問わず彼を好きな人は多いと聞く。しかし、そんな学校の人気者の彼が、私のような目立たない上に地味な普通の生徒に何の用があるのだろう。彼とは学年は一緒だけど、クラスは違

う。それに何か接点があるわけでもない。誣(し)いていうのならば、家が近所にあるということくらいだろうか。

「きっと、海里(かいり)ちゃんは俺のこと、あんまり知らないよね。」

飛鳥くんは少し困ったような顔をして私に話しかけれくれた。

「え、あ、あの。そ、そんなことないよ。」

「ほ、本当？」

「う、うん、本当だよ。みんな飛鳥くんは素敵な人だって言ってるよ。」

つい、口から出てしまった「みんな」の三文字が、私の恋心を隠すように言葉に覆いかぶさった。すると、飛鳥くんは嬉しそうな顔をした後に、また、困った顔をした。

「海里ちゃんは？」

「わ、私？」

「そう、海里ちゃんの目には、俺がどんな風に映ってる？」

そういった飛鳥くんの顔は真剣だった。どうしよう。噂は聞いたことあるけれど、飛鳥くん本人とお話しするのはもちろんのこと、こんな近くで見るのは初めてだった。それに、想い人にどう見えるといわれても、素直に答えることなんて出来ない。

「ごめんね。」

「え？」

「俺の今の質問はとっても卑怯だったよね。」

「う、うん？」

訳がわからず、謝る彼に、私はただ肯(うなず)くことしかできなかった。

「あのね、海里ちゃん。海里ちゃんは、俺のことをどう思っているか分からないけれど、俺は海里ちゃんのことが好きなんだ。だから、俺と付き合ってください。」

真っ直ぐに見つめる二つの瞳が、眼球いっぱいに私を映している。誰が見ても笑い出すような間抜けな顔をしている私。どうしよう、夏服なんて言っている場合じゃなくなってしまった。

「あ、飛鳥くん、えと、あの。」

「俺、さ。返事、待つことか出来ないから、さ。」

そういって彼は一呼吸入れた後、強調するように力を込めて言い放った。

「今、答えてほしいんだ。」

◆◇◆◇◆

「おはよう、巫女(みこ)。」

昨日は眠れなかった。恋をしてそれが思わぬ形で実ると、こんなにも目が冴えるなんて知らなかった。なのに何故だろう、気分はすごく良くて気を抜いたら頬が緩みきってしまいそうだ。

「おはよう、海里。どうしたの、何かあった？」
「え、どうしてそんなことを。」
「そんな『私は悩んでます』って顔で挨拶されたら、誰だってそう思うよ。」
「そ、そうかな。そんな顔してるかな……。」

ダメだ。パチンと緩んだ頬を叩き、私は自分なりに引き締めた。巫女からすれば、全然変わっていないらしいけれど、これ以上は今の私には無理な話だった。そんな私を見て、彼女はその理由を詮索し始めた。私はなぜか、そのこと隠すように質問の答えをはぐらかした。

「ショートホームルームを始めるぞ。さっさと席に着けよ。」

ドアが開く音がして、担任の先生が声をかけながら教室に入ってきた。巫女はまだ詮索したり無いみたいだったけれど、担任の登場により不満そうに席に着いた。今回は先生に助けられた。

休み時間にも彼女は私に質問してきたけれど、私ははぐらかし続けた。すると、呆れたのか、それとも聞いても無駄だと思ったのか、彼女はとうとう理由を聞かなくなった。

このことを話したくない訳じゃない。逆に、出来るのことなら全て話して、どうするべきなのか相談したいくらいだ。でも、巫女には最近、他校の彼氏ができたから、その人の付き合いをどうしていくかで頭がいっぱいな筈だ。それに、私はまだこの現実を少し自分の中で理解する事が出来ていない。

確かに昨日あったことは、現実に起こったことだ。でも、あれは、あの告白は本当の気持ちだと思ってもいいんだよね。罰ゲームとか

じゃなくて、飛鳥くんの本心だと考えてもいいんだよね……。
多分、きちんと受けていたであろう今日の授業の内容は、私の頭の中には全く残らなかった。

◆◇◆◇◆

「もし答えを出さなかったら……、わかってるよね。」
そういって彼はもう一つ条件を出した。それは学校から彼が帰るまでに答えを出すことだった。その日の放課後、返事をしなければならないのに緊張してしまい、教室から友達らしき人たちと部活へ向かう彼を、廊下の影から見送ってしまった。遠目だけれど、彼は楽しそうに笑っていた。その顔を見るとなぜか私の心の中もふわっと温かくなった。あの笑顔をいつまでも見ていたい気までしてきた。
「……海里、何やってんの。」
巫女の声で現実に引き戻された。私は、どれくらい呆けていたのだろうか。右手にはめた時計を見れば、そんなに長い時間でもなかった。時間にすれば大体五分程度。ただ、廊下の壁の影で一人ニコニコとしながら呆けていれば、かなり怪しい人だろう。ああ、なんて恥ずかしい。
「海里、本当に大丈夫なの。今日、なんだか変だよ。」

私自身でも驚くような行動をしているのだから、他人から見れば、心配もしたくなるような奇怪な行動ばかりなのだろう。友達までも心配させてしまうなんて。なんだか、自分が情けなくなってきた。

「だ、大丈夫だよ。ちょっと考えことしてただけだよ。もう平気だから。」

一瞬、巫女に相談しようかどうか迷ったけれど、窓から見えた正門に他校の制服に身を包んだ男の子が立っているのが見えてやめた。きっと、巫女の彼氏さんだろうから。

「わかった。何かあったら私に言ってね。頼りないけど力になるからさ。」

こんな時の何気ない気遣いが巫女らしくって素敵。私は巫女のこういうところが好き。彼女の心が直接伝わってくる気がして、幸せな気分になる。だから、時にそんな彼女が羨ましくなる。

私とは違って明るくて誰からも信頼されている巫女。クラスでは学級委員を立派に務めている。人前で話すことが得意で、自分の意見をしっかり言えるしっかりした女の子。私がこうなりたいと思う女の子。

飛鳥くんは、私のどこがよかったんだろう。私のどこに魅力があったんだろう。わからない、私には何もわからないよ。

ねえ、お願い。教えてよ、飛鳥くん。

空が悲しいくらいに晴れ渡っている。梅雨というジメジメした空気と雰囲気をもたらす季節。それを越えた世界は、一歩一歩だが確実

に夏へと向かって歩いていた。

◆◇◆◇◆

どんよりとした気持ちを抱えたまま、爽やかな風が初夏を運ぶ通学路を一人歩いて帰る気にもなれなかった私は、三棟の三階の一番奥の部屋に位置するに図書室いた。校内で最も正門から離れていることで有名なこの部屋で、私は風に揺れる薄紅色のカーテンの隙間から見え隠れする空ばかり見ていた。

青すぎる空は私の気分を感傷癖（かんしょうへき）、つまりセンチメンタリズムを溢れさせて底なしの沼のように引きずり込んでいく。たださえ、場の雰囲気に流されやすい性格なのに今日の空はあまりにも卑怯だ。私とは真逆の位置に立ちつつ、私のこと関心がなさそうな振りをして観察するように見ている。

放課後に様々な目的を持ってやってくる生徒たち。ふと室内に視線を移すと、彼らで埋め尽くされた机が規則正しく行儀よく鎮座していた。それらは何の目的も無くここへやってきた私を鬱陶しそうに見下してくる。悪かったね、どうせ私は何の目的も持たない異端児ですよ、だ。

ここで整頓された本のように勤勉にペンを動かしている彼らが、私を見ているわけが無いのに、私は何かよく分からないものに拒絶された気分になった。気持ち悪いな。どこか他の場所で気分を落ち着けたい。

でも、どこに私望むような静寂で脆弱、尚且つ、孤独で孤立している所があるだろうか。そんな事を考えながら、私は逃げるように最も奥の机の右端に座った。幸い、この机には誰も座っていなかった。

いつもの癖で頬杖をつこうと机に肘を乗せたとき、何かが私の肘の邪魔をした。それは分厚くて、背表紙が少しはげかかった古い本だった。私には分かった。それには愛があった。どんなに表紙がボロボロでも、黒ずんで紙の色が変わっていても、所々破れている箇所があっても、それはこの本が愛されている証拠だ。

「愛されているね、君は。」

私はその本に微笑みかけて、窓から漏れる日差しが真っ直ぐにあたる場所へ、その本を動かした。

何気なく目をやる全ての場所に届く日差しが、まるで光の牢獄の格子ように私の行動を制限する。もう彼の所へ行く事ができない気がして、その空想を遮断するように私はゆっくりと目を閉じた。視覚を奪われた身体。研ぎ澄ました耳から入る情報の数々は、睡眠不足の私には心地よい子守唄だった。

気が付かないうちに零れた涙は、日差しに反射してキラキラと輝いていた。

◆◇◆◇◆

意識の戻った私が一番最初に見たのは、愛されている本でも、飛鳥くんの笑顔でもなく、学校の下校時刻を告げている壁に掛けられた時計だった。もう、帰らなくちゃいけない時間だ。どれくらい私は眠っていたんだろう。放課後になってから、一度も時計を見ていなかったからわからない。何だか目が痛い。頬に触れて見れば、かすかに残る雫の通り道。そうか、無意識のうちに泣いていたんだね、私は。

もうこんな時間だし、飛鳥くんは帰ってしまっただろう。嗚呼、約束破りは恋破れ。私の短かった夢のような時間は今日で終わりだ。初恋だったのに、やっとはっきりと理解できた気持ちだったのに。自分で打ち壊しておいて、言うような言葉ではないけれど。やだ、また世界が滲んで見える。勇気も度胸も無いくせに、泣く権利なんて無いのに。

昔から、こんな性格でうじうじしてる私が嫌いだった。リーダー体質の子の後ろで、少し下って歩いてばかりいる。何かあればすぐに諦めて、そして後悔して影で泣く。そんな自分が大嫌いだった。変わりたくて変わりたくて仕方が無くて、でもきっかけが無くて動けずに、ずっとこの場所に留まり続けていた。

私は本当にこのままでいいの。変わりたい、そう思ったんじゃないの。これはきっと神様が「しっかりしろ。」と私に叱咤しながらくれた大事なチャンスなの。掴んで離すなんて出来ないの。静かに前を見据える。まだ、終わったわけじゃない。私は机の上に置いてあるカバンを乱暴に引っつかみ、翔るように夕日が差し込む図書室の扉を開け、走り出した。

◆◇◆◇◆

彼を見つけたのは、私が初めて彼を見た学校近くの公園だった。天才だの何だの言われている飛鳥くんだけど、毎日毎日くたくたになるまで練習して、その後まだこの公園で暗くなるまで自主練習をする。知ってるよ、貴方のこと。泣きたくなるくらい、知ってるよ。

私に気が付いた飛鳥くんが、こちらへ走ってきた。

「……海里、ちゃん？」

「飛鳥くん、嫌いにならないで。」

もうだめだ。抑えことなんて、出来ないよ。こんな約束破りの私を赦してください。

「知ってる、私、知ってるよ。飛鳥くんは頑張り屋さんだって。誰よりも努力していて、練習していて、それで、それでね。私は知ってるの。大好きなの。そんな飛鳥くんが、私は大好きなんだよ。」

ふわりと優しい匂いが私を包み込んだ。しっかりした腕が私を抱きしめていた。

「一生懸命で、真っ直ぐで、頼まれたら断れなくて、それでも任された仕事はきちんとこなして、優しくて、気遣いが上手で、でも少し口下手で、小心者で、それでも全てのことに向き合っていく事ができる。」

「え、と。」

「俺はね、海里ちゃんに憧れていた。君は真っ白だった。そんな君

はとても綺麗だった。何度か見かけるようになって、そのうち目で追い駆けていて。気が付いたら君を中心に世界が廻っていた。」

彼への想いが、少し、また少しと膨らんでいく。言わないでほしい、でも言ってほしいの。

「俺はそんな君に惚れたんだ。」

屈託のない優しくて爽やかな笑顔だった。

好きになる、と言う事は難しい。そう思うのは、私が恋を知らないからかもしれない。不安なんだ、きっと。この一時の感情に身を任せてしまうことが怖いの。でも、この胸の高まりを信じたい。あなたへ抱くこの感情が愛であると願いたい。二人の間、きっとそこにはに確かな愛があると思いたい。

今、彼に抱く温かな感情。それはきっと幸せと言う感情。私たちの愛はまだ、羽化する前の卵だろう。でも、この想いを育(はぐく)んでいく事ができれば、それは立派な愛に変わる。そう信じて、今はこの感情に全てを任せてしまおう思う。

耐え切れない衝動に駆られ、私は彼を抱きしめ返した。一瞬だけ狼狽したような顔をした彼の鼓動の音は落ち着きがなく、どくどくと大きな音を立てていた。飛鳥くんは静かに抱きしめる力を強めた。そしてしっかりと息を吸って言葉を紡いだ。

「そんなときも守ってみせる。だから俺と、俺といつまでも一緒に歩いてくれますか。」

お願い、普段信じない神様。出来るなら、さっきの願いを無効にし

て下さい。その代わり、新しく始まろうとしている恋心にほんの少しの勇気を下さい。

「……はい。」

涙の視界に輝く彼の笑顔を、私はきっと忘れないだろう。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3591u/

初恋リグレット

2011年10月8日17時36分発行